

小児科医の本領とその評価

日本小児科医会会長

内藤壽七郎

それまでも多数の都道府県毎の小児科医会は存在していたが、より強力なものにして世に寄与することを目指し、全国的小児科医会結成の機運が熟して、昭和59年（1984年）5月18日、日本小児科医会が発足して十年が経過した。この間の歩みは中尾聡子理事の「日本小児科医会十年の歩み」に詳しい。

当初の目的として小児医学の成果に立脚しつつ、小児医療、保健、及び福祉の充実向上を図り、以て小児の心身の健全な発達と人格形成に寄与することにより、国家地域の発展の基礎確立に貢献することとなっている。

小児医療等の充実向上については、春秋2回、学会および医会がそれぞれセミナーを開催。医会においては全国7地区が主催することにより会員の参加を容易にした故か、毎回の参加者は予定数を超過する状態であることから推しても、その目的を達しつつあることが窺える。

さて、小児の人格形成に対しての寄与という点では、いかがな状態であろうか。現在の診療報酬体系下においての小児医療では、親に対して診療についてのインフォームド・コンセントを行う余地すらないのが、その実状である。病院においては小児科は縮小され、さらには廃止すら行われている。それは診療収入が少ないからである。具体的に言えば薬使用は量も僅かだ。種類も少ない。専ら患者数に頼っていたが、それもひと頃の1/3以下が多い状態である。これでは、新卒の医師に小児科志望が激減するのも致し方あるまい。社保関係部門の理事役員の方々の努力にはその労を多としつつも致し方ない。しかしそれで手を拱いていてよいであろうか。

ここに於いて発足時の目的のひとつである人格形成に寄与ということを取り上げてみては如何であろう。人格形成基礎の時期は自己認知の始まる時期と一致するようである。2歳を中心としたその前後半年と考えられる。この時期、親はその発達の過程に対して殆ど無知に等しいのが多い。禁止形の言葉、駄目、いけませんの連発か体罰かで、伸びようとする脳神経の突起を抑止することに専念し、真直ぐ伸びるはずのものを歪めてしまうことが多く、性格の基礎作りが正しく行われていないようである。この時期にアドバイスのチャンスを持つのは小児科医ではあるまいか。

温かい心を持った、自主的で積極性に富んだ人格の基礎を育てるよう指導することは、小児の未来に大きな関心を持つ小児科医ならやれるであろう。ただし、指導には相当長時間を要する場合が多い。一口で数多くやることは不可能で、自ずから制約される。問題は国や社会がこのことに理解と十分な評価を与えてこそ初めて小児科医にも受け入れられるであろうということである。

物を使わない言葉のみの指導であるが、これに対する評価を十分にすることこそ21世紀においても日本が先進国であることを保ち、近隣の国、さらには地球上の国から敬愛されることに連なるであろうし、これを忘れると必ずや国は衰え、さらには滅亡の途を辿るであろう。